

小田実全集（評論 第35巻）

中流の復興



講談社

小田実全集

Makoto Oda





目次

序章	被害者にも加害者にもならない未来へ	7
第一章	「戦争に正義はない」からの出発	27
第二章	「サラダ社会」実現への積極的提案を	61
第三章	市民自らが政策をもとう	85
第四章	中流の復興	123
第五章	古代ギリシヤから考える民主主義と文学	143
第六章	「刀を差さない心」をもつ日本人として生きる	165
第七章	「日本の価値」とは何か	185
	「あながき」にかえて——友人、知己への手紙	195
	恒久民族民衆法廷	201



# 中流の復興



序章 被害者にも加害者にもならない未来へ

## 戦争の「臭い」のことから

ある集会で、C. ダグラス・ラミスさん（政治学者）がアレン・ネルソンさん（平和活動家）から聞いた話として、米軍の海兵隊員だったときの彼のベトナム戦争の体験の話をしていました（注1）。ラミスさんもいつとき海兵隊にいた人ですが、実戦の体験はありません。ネルソンさんが言われたのは、実戦のなかでは音楽がないということでした。戦争を描いたテレビドラマや映画では、みんな実戦の最中に音楽が流れているけれど、そういうものは一切なかった、ということ、ネルソンさんから聞いた話として集会でしゃべっておられて、私は興味深く聴きました。

音楽のことはさておいて、もう一つ大事なことで、それは臭いです。それも死体の臭いです。戦争は必ず人を殺し、人は殺される。死体がそこへ転がる。そして、すぐには片付けられないから、そこに放置され、それは臭いを発します。テレビドラマやドキュメンタリーフィルムで見ると、臭いは伝わって来ない。テレビのニュース映画でも実戦を撮った映画でも、臭いは伝わって来ない。しかし私が今、私の大阪での空襲体験から強烈な印象をもちつづけているのは、臭いです。

つまり死体がおつて来る。空襲の最中は、死んだ直後ですからにおわない。しかし、それが残されて数日間経つて、私たち中学生が焼け跡の片付けに動員され、死体が転がっているのを引きずり出したり、がれきのなかから出して来るそのときにおつて来る、腐っているからです。

私は戦後長い間、鮭の缶詰が食べられなかった。鮭の缶詰の臭いは、その臭いにそっくりなんです。その臭いが強烈に残っていたから、戦後、食料がない時代に鮭の缶詰が配給されたこともあったのに、

私は本当に食べたかったのに食べられなかった。その臭いがたまらなく嫌だった。このことが私には強烈な印象として残っています。

つまり、実際の戦争には、音楽はないが臭いがある。しかも臭いは残るんですね。戦争の臭いというのは、武器の臭いは鉄の臭いですが、それだけではない。死体の臭い、これが強烈です。そのことはやっぱり戦争について考えるとき、記憶しておかなければいけないと思います。

それからもう一つ、私が戦争について考えるのは、軍人の思想、戦争の思想に巻き込まれてはいけないということです。「正義の戦争がある」と言い出して戦争のことを口にする人は、どうしても軍人の思想になってしまふ。他方で、私たちは広島、長崎に原爆が落とされて、原爆でもうすべてが終わって、原爆の出現によって歴史が変わった、原爆によって広島以前と広島以後に分かれると考えがちです。でも、軍人たちはそう考えていなかったし、今現在も考えていないのではないのでしょうか。その証拠に、それは現在の劣化ウラン弾にまで通じていると思うんです。

私が体験した大阪空襲を含めて、米軍の通常兵器による多大な殺りく、多大な大量殺人が都市空襲において行われました。もちろん、これはアメリカ合州国が最初ではなく、日本が始め、ドイツが始めたことですが、その仕返しのようにして、今度はアメリカ合州国による猛烈な焼き尽くが行われた。その通常兵器による空襲、その延長線上に広島、長崎があったと考えるべきではないのだろうか。われわれ非軍人は、通常兵器の空襲と別の形で原爆があった、その原爆によって歴史が変わったから、それ以後原爆の投下は行われていないんだと、広島の思想的意義などを考えてしまふ。しかし、投下した彼らにとっては爆弾の一種に過ぎなかった。

## 原爆も劣化ウラン弾も「通常兵器」

広島、長崎に対する原爆投下の命令書を私は見たことがありますが、その命令書には「爆弾」に加えて、ただ一行「特殊<sup>スペシャル</sup>」と書いてあつただけです。「原子爆弾」なんて書いてない。「特殊爆弾」としか書いてない。ただの武器の一種であるというふう<sup>に</sup>に理解されていた。軍人たちはそういうふう<sup>に</sup>に命令されてそれを遂行しただけで、世界史的意義なんて感じていない。戦争がつづいていけば、原爆をもつともつていれば、どんどん落としたでしょう。でも、もつていなかったから落とさなかつただけ、戦争は終わつたし。武器が当たり前なら原爆も当たり前。だから武器を使うことが当たり前なら、原爆を使うことも当たり前です。その証拠に、原爆を広島、長崎に投下した後米軍は空爆をつづけて、日本に対する都市の焼き尽くしをして、嫌と言うほど焼き尽くして、それが大阪に来たのが一九四五年八月一四日だった。

広島、長崎の後、日本はようやくポツダム宣言受諾を連合国に申し出ましたが、そのとき「国体の護持」が必要だと言ひ出して、その条件をアメリカ合州国が認めなかつた。しかし、最後に八月一四日になって「これ以上国民の悲惨を見ていることはできない、私はどうなつてもいい」と昭和天皇が言つて、そして八月一五日に戦争は終わつたと歴史家が書いていますが、これはまったくウソです、天皇はその前にわが身の安泰を知つていた。

当時のニューヨーク・タイムズ紙のマイクロー・フィルムのコピーを私はもっているのですが、八月一日付けには、「日本は降伏を申し出る」「米国は天皇を残すだろう」と書かれ、さらに翌一二日付

けには、大見出しで「連合国はヒロヒトの存続を決定へ」「占領軍司令官の意向による」「マッカーサーがその地位に予定されている」と書いてあります。これで天皇の身の安泰、生命の安全、天皇制の存続などが決定され、それらはスイスなどを通じて日本政府や天皇、その周辺にも伝えられました。ここに期せずして日本とアメリカ合州国という二つの国家権力の結託があり、その結託の中心に天皇の「命乞い」がありました。

しかし、それでもなお日本政府はポツダム宣言の受諾を渋ったんです。アメリカ合州国は一日以来中断していた日本への空襲を再開します。一四日午後には大阪も空襲を受け、私はそのなかで逃げまどった。これらの空襲のなかで、多くの市民が殺されましたが、彼らはいつたい、何のために殺されたのか。

戦争は広島、長崎ですべてが終わっていたはずですが、なのに、彼らは、原爆も特殊な爆弾に過ぎないとは思っていなかったから、空襲を継続した。原爆をもう一本もつていたら、投下したかもしれない。しかし、もうもつていなかったから、通常爆撃でやってのけた。大阪が受けた空襲はその一番でかいやつです。

そのような精神構造というか、頭脳構造を考えると、アメリカ合州国の軍人たちにとっては原爆は決して歴史のどん詰まりに位置するようなものではなかった。通常兵器の一つの特殊な形態に過ぎなかった。だから、原爆をもうちょっと「きれいな」原爆にしたり、あるいは小型化して、戦略核兵器を戦術核兵器にして誰でも使えるようにするということを、その後せっせとやった。その変形が劣化ウラン弾です。今、劣化ウラン弾を平気で使うのは、要するに兵器だから。特別なもの

でも何でもないからです。

一九八三年に「イスラエルのレバノン侵略に関する国際民衆法廷」を、私は努力してPLO（パレスチナ解放機構）の人たちと一緒に東京で開催しました。そこでノルウェーから来た、ノルウェーに留学して医者になったアジア人が証言してくれたので、いかなる爆弾や砲弾がレバノンの人たちを襲ったかが、非常に具体的にわかったんです。たとえば、一発からだに入るとぐるぐるぐるぐる体内を回って、人体が「歯みがき粉のチューブ」みたいになってしまうような爆弾や砲弾を使ったり、それはもう無茶苦茶なことをやっている。そういう兵器はもちろん、ソビエトのほうも持っているだろうし、アメリカ合州国も持っている。だから同じようなものをお互いに開発していた。

それは誰でも使えるんです、武器の一種だから。原爆もそうです。結局、戦争が展開していくとずっとそういうメンタリテイになってしまふんですね。だから核兵器、核兵器と言うけれど、われわれが騒いでいるだけであって、軍隊のなかではたまたま使っていないだけであって、その気になればいくらでも使えるんです。だから、いまだにもっている。でも、ほかの国がもつたら怖いから、自分たちで独占するようになっていのではないのでしょうか。

そのいくらでも使えるものを使えないようにしているのは、結局、市民の力でしよう。そういう小さな人間である私たちが、「原爆反対だ」と叫んでいることによつて、抑止力になっていると思います。二つの大きな勢力がお互いに原爆をもつて威嚇しあうという抑止力ではなくて、それに対して市民が声をあげて、今度落とされたらえらいことになるということ、反対運動を起こす。それが一つのモラルの力として、道徳的な力をもっているからこそ、原爆は使われないですね。ですから、軍人の

メンタリティをもつてはいけない。市民は市民の精神構造と頭脳構造をもつて、対処しなければいけないと私は痛感します。

「歴史は、アウシュビッツ以後とアウシュビッツ以前とに分かれる」と論じた人が、たくさんいます。極端に無茶苦茶なことが起こったから。しかし、どうもそれは思想的に考え過ぎであつて、そういうことを言っているのはわれわれ民間人や思想家だけで、当事者はあまり考えていない気がします。大事なのは、過去の問題としてだけではなく、私たちの現在の問題として考えることです。昨今のイスラエルのレバノン空爆だつて、それがずつとつづいているものとして考えざるを得ない。つまりアウシュビッツで歴史は終わっていない。新しい歴史が始まったはずなだけけれど、現実には始まつておらず、そのまま続いているんです。

それと同じようにつながっているのが、たとえば民族「浄化」のコソボの問題です。別にそこで新しい歴史ができたというのではなく、結局つながっている。アウシュビッツから広島、長崎、そして最後にエスニツククレンジングが出て来る。あるいはイスラエルのレバノン空爆が出て来る。平気につながっていく。その現実について、私たちはもつと考えなくてはいけないと思います。悲しいことです、それが現実です。

### 「世界平和宣言」としての日本国憲法

歴史がどん詰まりに来て新しい歴史が始まる、広島で終わり、アウシュビッツで終わり、というふうには歴史は進んでいないのだけど、ただ、そのなかで一つ大事なことがありました。それは、これ

までとはちがう世界のあり方を考え出そうとする動きが生まれて来たことです。その一つが、日本国憲法です。

基本にあるのは、これまでの世界のあり方を丸ごと全部否定することによつて、新しい世界をつくらうじゃないかという考え方です。その基本を具体的に法律としてつくつたものが、日本の憲法でありその第九条です（注2）。これは、革命的憲法であり革命的政治原理です。そう考えていただきたい。一方、ほかの国はこうした革命的憲法をもっていない。みんなどん詰まりに來ているはずなのに。これまでと同じ世界を継続させずに、ちがう世界のあり方を求めてその根本を示したのが、日本の憲法です。

大きな戦争がようやく終わつて、戦後の新しい時代が來たとき、人權の問題については、国連が「世界人權宣言」を出しました。人が抑圧され虐殺されるような世界で、人權の問題をちゃんと考えなくてはいけない、これから新しい世界をつくらうじゃないかということを、「世界人權宣言」が示したわけです。アウシュビッツに対して「世界人權宣言」を出した、少なくとも原理的には出しました。

アウシュビッツに対して「世界人權宣言」が出たなら、戦争のために世界の人間が無茶苦茶に殺されるということに対しては、「世界平和宣言」を出していい、そうすべきだということになる。しかし、国連から「世界平和宣言」は出ませんでした。国連は、国連をつくつた連中が戦争をしたのだから、出せるわけがありません。そういう「世界平和宣言」に値するものを、一国の憲法の形で出したのが日本の憲法です。だから、日本の憲法はおのずと世界的なものなのです。「世界平和宣言」なのですから、ベトナム反戦運動をしていたころ（注3）、私が米軍の脱走兵たちの世話をしているときに、脱走

兵はよく「この国の憲法はずばらしい」と盛んに言っていました(注4)。それは、この憲法が彼らにとつても大事な憲法であり、誰にとつても大事な憲法だったからです。おのずと国際的、世界大に広がるような規模の大きな視点、「世界平和宣言」としてあつたと思います。

そういうことを憲法を考えるとときの議論の根に置いてほしい。その憲法を守り抜くということとは、一人ひとりの小さな人間の努力なのです。その努力をすることは、世界史を変える大きな作業だと言ってもいい。その革命的事業は、小さな人間の私たちにこそ、できることなんだと考えていただきたいのです。

そして、そういう小さな人間のあり方の基本をおさえたのが、憲法二四条、二五条なんです(注5)。二四条で言えば、男女の平等についてはどこの国の憲法にも抽象的に書いてあると思うんですが、非常に具体的に生活の実感、小さな人間の普通の人生の実感に基づいて出て来るのは、日本の二四条だけです。男女の平等をもう少し人間の生活に即して言うと、婚姻があります。結婚の形、家庭のなかの平等というのは大事です。それに基づいて婚姻について細かく書いているのは、二四条だけです。それから二五条。人権、人権と言うけれど、最低限の生活が保障されなければ人権なんてないでしょう。獣のような生活ではなくて人間の視点で生きる生活、最低限の健康で文化的な生活が必要ですね。それを規定したのが二五条で、しかもそれは国家の義務として保障しなければならぬと書いてある。これはなかなかすばらしいことです。

そうやって努力しながら築いていかなければならない小さな一人の人間の人生を、最大に脅かすのが戦争です。そこで九条の存在が生きて来る。九条と二四条、二五条は、小さな人間の生活を支える

ために、そうやってつながっていくのだと思います。

## 被害者であるからこそ加害者になる

戦争を考えるとき、非常に大きなことが一つあります。戦争で殺されるのは市民だということ。死傷者は、その大半が市民です。しかし、もう一つ大事なことは、市民は、殺されるだけではなくて、殺すこともあるということです。

政治をやる連中というのは、戦争をするときに自分の手でするわけではない。えらい人は自分の手で戦争をするようなことはありません。結局、小さな人間の私たちを駆り出して戦争をさせる。私たちはその意味において被害者です。しかし、戦場に駆り出されたら、勝たなければいけないんだから、相手をやっつけます。相手の兵隊、相手の市民を殺す。殺される人間が殺す側にまわる。私たちのような駆り出された被害者が、殺す側、加害者の側にまわるわけです。この非常に重要な事実を認識する必要があります。

えらい人は後ろで操っていたらいいので、実際に戦争するのは私たち小さな人間です。だから、その小さな人間が立ち上がって戦争をしないと決めたら、戦争はできないわけです。戦争をする側が「おまえがしろ」と言っつて小さな人間に押しつけて、小さな人間は駆り出される。これは被害者ですが、その被害者が戦場に出ると加害者になる。

「被害者であるにもかかわらず加害者になる」というのではなくて、「被害者であるからこそ加害者になる」。私たちはこの認識をもつ必要があると思うんです。被害者Ⅱ（イコール）加害者なんですよ。

「被害者であるにもかかわらず」ではなくて、「被害者であるからこそ」まさに加害者になるんだということを忘れてはいけないと思います。

そういう関係を私が一番感じたのは、ベトナム反戦運動をしていたころの、米軍の脱走兵、若い兵隊たちからです。彼らのあのころの平均年齢は一九・二歳。その若い兵隊たちが戦争に行くのを拒否していた。彼らは否応なしに召集令状が来て駆り出されたから、被害者です。自分の人生を無にして行くんですから。しかし、その被害者である脱走兵がベトナム人を殺す側にまわると、加害者になるんです。

それは、戦争に駆り出された日本の兵隊と同じです。日本の兵隊も行きたくないのに行かされて、そして今度は中国人を殺す側にまわった。被害者だから加害者になる。そういう被害者⇨加害者になる関係、これをやめなければいけない。やめるのに一番いいのは戦争をしないこと、軍隊をつくらないことです。軍人とはちがう論理、原理で、ちがう次元に立つてものを考える必要があるということ。私は強調したい。

被害者⇨加害者になる戦争のメカニズム、軍隊のメカニズムを断ち切らなければなりません。そこから自分を切り離さなければいけない。自分たちの平和な世界をつくるための論理で変えていかなければいけない。それが、今まさに問われています。

もつと大きな視点で言うと、日本はアメリカ合州国に比べると小さな国ですから、日本はアメリカ合州国の言いなりになって、ベトナム戦争に否応なく参加させられた。当時、日本人の多くは反対したけれど仕方なかった。結局、日本は日本の基地を使われた。そして、基地を使われることによって

今度は加害者の側にまわった。こういう連環を変えなければいけないでしょう。

端的に言えば、沖繩ではその状態がまだつづいています。沖繩では米軍に土地をとられて、結局職を失った人たちが基地のなかで働く。これは被害者ですね。しかし、その基地が使われることによつて、アメリカ合州国のベトナム戦争に加担してベトナム人を殺す側にまわった。被害者であることによつて加害者になった。職をなくした農民が、基地で労働者として働くようになった。何をしていたかというと、米軍の爆撃機に爆弾を詰め込んでいた。その爆弾は、ベトナム人を殺したわけです。この関係は、沖繩で今も変わっていません。

「アメリカの戦争」は今もつづいています。これからもつと在日米軍基地を強化していく、そして米軍は世界中に戦略を広げると言っています。中近東にも自衛隊が行った。在日米軍の再編は、米軍の行く先のどこにでも自衛隊がついていく体制を、安保を「再定義」して拡大しようと意図してやっている。そうすると、さらに被害者であることによつて加害者になるでしょう。

こうしたことの基本にあるのは、日米安全保障条約という軍事条約です。われわれは、この軍事条約をやめなければならぬ。われわれはアメリカ合州国と日本の間に対等、平等な関係を新たに構築しなければなりません。

そのときのモデルは、日中平和友好条約です。日中平和友好条約は、お互いに対等、平等な関係で「覇権を求めず求められず」という関係をつくり出そうじゃないかというものです。もう一つ大事なことは、紛争の解決にあたっては武力行使をしないということが定義されている。これはすばらしいことです。

そういう基本に立つて考えれば、日米関係は、軍事条約を中心にした内容で、日米平和友好条約というものは現在も存在しないんですね。軍事条約しかない。それなら、日米平和友好条約をつくって、その上で防衛の問題などがあるんだつたらそこで討議しようじゃないか、と考えていけばいい。初めから軍事条約が先行するようなあり方は、日米関係としてまちがっています。それはどこの国との関係においても同様に言えることです。

### 「非現実的」な軍拡論・改憲論

二〇〇六年一〇月に京都大学の安藤仁介名誉教授が、「テポドンが市民の上に落ちたら市民も目覚めるだろう」と発言しています。「国民保護計画」をつくらうとしている、京都市の委員をやっている人ですが、この「北朝鮮のテポドンが落ちたら彼らはわかるだろう」という発言に欠けているのは、軍隊があるからテポドンが落ちて来るかもしれないわけで、もし日本が軍隊も何もない、米軍の基地もない、何もない国だつたらテポドンは落ちて来ないという発想です。

自衛のためには軍隊が必要だ、軍備を強化しなければならぬと、政治家やマスコミがよく言いますが、私はそういう人たちのことを、非常に非現実的だと思えます。私が、自衛隊は段階的に解消し、世界全体を非暴力の世界に変える努力を、憲法に基づいてやっていくべきだと主張すると、よく「非現実的だ」「理想論だ」と言われますが、そもそも日本は自衛のできる国なのか、という大問題から考えなければなりません。

私が子どものときに体験した戦争で最もつらかったのは、空襲と飢えです。都市を全部焼き尽くす

空襲の下で逃げまわりながら感じたのは、私たちにはこれに抵抗するすが全くないということでした。そのころの日本には、もう石油がなかった。石油がなければ、戦闘機は飛ばないし、戦車も動かない。何も動かない。しかし、今だつて日本には石油がありません。外国から運んで来るしかない。そんな日本に戦争ができると考えるほうが非現実的です。

そして、食料もなくなれば、待っているのは飢えです。今、日本の食糧自給率はカロリーベースで四〇%ぐらいです。穀物自給率に至つては、二八%に過ぎない（二〇〇五年）。ほとんどを外国から運んで来なければ食べていけない。そういう資源がないという問題を現実的に冷静に考えたら、日本は戦争なんてできないんです。

ところが、こういう根本的な議論は、誰もしていない。テレビの討論会や新聞の記事でも、誰も問題にしていない。そもそも石油はあるのか、食料はあるのか、そんな状態で戦争ができるのか、という前提には誰もふれない。戦争になつても、飛行機や新幹線が動き、食料がいつものようにふんだんにあると夢想しながら、「自衛のため」に軍隊を強化しなければならぬと主張するのは、ものすごく非現実的で、夢物語です。

そういうまやかしの「現実主義者」にふりまわされても仕方がないでしょう。本来広範囲にわたる問題を全部抜きにして、自分に都合のいい局所だけの話をしていると、軍人みたいな変な発想になってしまう。一番大事なのは、そういう広範囲にわたる小さな人間の問題を根本的に考えることです。

たとえば、アメリカ合州国もフランスも中国も、食料はたくさんあります。でも、日本にはない。それらの「普通の国」と日本はちがうんです。韓国も同じだ。日本も韓国も、アメリカ合州国やフラ

ンスや中国とはちがう国なんだということを認識しなければいけません。そういう日本の戦後の繁栄を築いて来たのは、平和憲法です。曲がりなりにも平和経済、平和産業でやって来て、これだけ豊かな国をつくつたのは、世界の歴史のなかでも初めてなんだということを考えなければならぬと思います。

何も無い日本をきちんと守るには、戦争ができない世界をつくらなければなりません。そのためにわれわれの憲法があるんです。この世界的な理想、原理、原則を実現するために一歩ずつ進むことが、日本を守る具体的な道であり、戦争ができない世界をつくる一番現実的な方法なんです。そういう「現実主義」に徹することが、今一番大切なことです。

北朝鮮の核兵器の脅威を言うのだったら、防衛庁のシビリアンとしてトップの地位にいた元官房長・竹岡勝美さんが盛んに主張していることには、どう答えるのでしょうか。日本海沿岸にずらりと並んだ原発（原子力発電所）をどうするんですか。そこに一発撃ち込まれたら終わりですよ。

そういうことを誰も問題にしていません。彼はそのことを書いてあちこちに配っておられるけれど、私はそれに賛成です。原発の問題も考えなければいけないでしょう。全部を考えた上での話なので、そういうことをこれから私の話を中心にして考えていただきたいと思えます。そうでないと、被害者Ⅱ加害者のくり返しになってしまう。

「小国の立場に立つて考える」という姿勢が必要です。日本は片方では大きな国なんだけれど、もう片方では小さな国なんです。その力関係において、被害者が加害者になるということが出て来るので、あらためてそれを考える機会になるといいと思います。

(注1) ベトナム戦争

一九五五年、アメリカ合州国の支援を受けて南ベトナムに親米政権が誕生。しかし反米勢力の抵抗が続き、一九六〇年には北ベトナム政府の後押しを得て南ベトナム解放民族戦線が結成され、内戦状態となる。そこでアメリカ合州国は、六四年の「トンキン湾事件」を口実に軍事介入。六五年、米軍は北ベトナムの空爆を開始(「北爆」)。ソ連などの支援を受けた北ベトナム軍と南ベトナム解放民族戦線との戦争に突入する。しかし解放勢力の抵抗は根強く、一九七三年一月、南北ベトナム政府、南ベトナム臨時革命政府、アメリカ合州国政府の四者が、フランスのパリで和平協定に調印。同年三月に米軍はベトナムから完全に撤退した。

(注2) 日本国憲法 前文

日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名譽にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。

#### 日本国憲法第九条

- 一 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
- 二 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

(注3) ベトナム反戦運動

アメリカ合州国のベトナム介入を批判する世界各地の人びとの反戦運動は、一九六五年の「北爆」を契機にさらに大きく広がっていった。とりわけアメリカ合州国では、公民権運動なども連動し、全土にわたって活発化した。日本では、小田実たちが始めた「ベトナムに平和を！市民連合（ベ平連）」の運動が、学生運動にも労働運動にも入れない無党派層の幅広い市民を集めた。誰でも入れる反戦デモを全国各地で積極的に行い、ニューヨーク・タイムズ紙に「殺すな」と大書した一面全面広告を掲載するなど、それまでの平和運動にはない大胆な発想で活動を展開した。

#### （注4）米軍脱走兵援助

一九六七年、米軍の空母イントレピッド号から四人の米兵が脱走したことを契機に、ベ平連の市民が中心になって、脱走米兵を支援する組織「J A T E C（ジャテック・反戦脱走米兵援助日本技術委員会）」が誕生。約二年間に脱走米兵一六人がスウェーデンに渡ることを援助した。彼らを日本から脱出させるまで、リレー式にかくまうて助けたのは市井の人びとであり、その人数はのべ二〇〇〇人にのぼると見られる。

#### （注5）日本国憲法第二四条

一 婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。

二 配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家族に関するその他の事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならない。

日本国憲法第二五条

- 一 すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。
- 二 国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。



第一章 「戦争に正義はない」からの出発

## 巻き込まれながら、巻き返す

安倍政権には、何も期待していません。彼のうやむやのうちに、ハッキリしないで、しかし着々とやっていくという手法は、非常に日本的ですね。佐藤栄作と似ています。佐藤政権は八年、あれは何か、わけのわからん、良かれ悪しかれ、粘らせるみたいな政治手法でした。「沖繩返還」というのが大きな目玉になったが、あれで本当に「返還」と言えるのか。でもそれでノーベル平和賞をもらったわけでしょう。だから、あいまいなうちにことが進行していくという感じでした。

小泉政権の場合は「劇場」だから、ワーツとやって、ハッキリしていました。ところが、安倍政権は歴史認識についても自分の発言がほとんどない。だから、われわれとしては、そんなに一喜一憂しても始まらないし、期待してもしょうがないと思います。いろんなことを自分たちで考えて、自分たちの政治をどうつくっていくか、考えたほうがいいでしょう。政治家に期待しないで、自分たちに期待したほうがいい。

韓国も中国も、小泉さえいなくなってくればよかった。あとは靖国問題がありますが、安倍は靖国神社に行ったにもかかわらず、その件を語らない。結局、穏便におさめることに韓国と中国が乗るのではないか。あの人は、ハッキリとした行動を取らないでしょう。

小泉みたいにやったら、韓国も中国も無視することはできません。日本の戦争責任の問題についても、何を考えているのかわげがわからない。侵略戦争をしたということも、「村山談話」を踏襲したということだけで、自らの言葉では言いません。韓国や中国も、日本の金の力、経済の力が強いから、

これを袖にすることはできない。それで結局、うやむやの人と付き合い合っていくことでしょうか。

しかし一方で、着々とことは進行しています。日本経済も、これからは積極的に武器生産をする日本経団連が言っている。そういう形で進行するでしょう。だから、ホリエモンとか村上何とかといったハネアガリはやっつけて、本格的にこれから、「普通の国」の軍需生産をやっていく。そういう形で進行していくから、日中友好も日韓友好もある程度必要になりますね。

向こうもそうでしょう。日本は金の力をもっているから、ハッキリ言われたら握手できないけれど、言わない人とだつたら握手できる。これから中国、韓国に行つて握手して、お互いに非常にいいまいた話をして、そこで妥協していく。それで長命政権をつくるという方針でやると思っています。

だから、一喜一憂しても仕方ないと思うんです。そのなかで着実に改憲の方向へと向かい、「普通の国」にする。教育基本法から手をつけてやっていく。老かいですね。小泉は猪突猛進のところがあるけれど、安倍は小泉とちがつて猪突猛進タイプではないから、革新側はハッキリしないといけないと思います。韓国や中国の出口に注目しても仕方がないから、革新側、市民側がハッキリと自分の原理をもたないと、いつしよに流されていくことになります。

結局、アメリカ合州国がつくっている大きな世界政治の方向へ、まやかしの方向へ全部巻き込まれていきつつある。それが嫌なら、自分たちの力があるかないかは別にして、自分たちの力を信じて、ハッキリとしたちがう方向に歩いていくより仕方がないのではないですか。野党は今のところ、それに流されていく傾向が強い。安倍の力のほうが強いから。だから野党としては、ハッキリとしたことを政策として打ち出さないといけません。野党がしっかりして、自分の原理、原則を押さえて、ハッキリ

とした反対論を言わないとダメです。市民もしつかりしないと巻き込まれていくばかりです。

これからの政府の動きは、「普通の国」としての強大な日本を、アメリカ合州国を模範としてつくっていくということではないですか。アメリカ合州国が軍事力で世界一だから、長いものには巻かれるでしょう。長いものを強大につくり出しているのはアメリカ合州国です。われわれはそれに巻き込まれるわけです。

大事なのは、「巻き込まれながら、さらに巻き返す」ということです。長いものを断ち切るだけの力を、われわれはもっていない。しかし、長いものを巻き返す、あるいは、巻き込まれないようにすることはできるはずです。革命をする、と叫んだってできないでしょう。巻き込まれない、巻き返すにはどうするかということですね。

巻き込まれない、巻き返すという力を、自分の力で原理、原則を抱いて少しでもつくっていかないと、世界は終わりだと思えます。世界を巻いているのは、アメリカ合州国です。そのなかに、みんな巻き込まれている。それを巻き返すんです。

最近、ラテンアメリカのキューバやベネズエラやボリビアなどで、アメリカ合州国の支配からどうやって巻き返すかということで、新しい動きが出て来ている。彼らも巻き込まれてはいるわけだけれど、そういう「非同盟」的な動きのなかに、何らかの形で日本も入ったらいと思えます（注6）。韓国も入るべきでしょう。もうちょっと大きな目でこれからどうするかということを考えて、「非同盟」的な動きをつくるとしたら、われわれはどうするのか、私たちは考えるべきではないかと思えます。

先日のキューバでの実際の「非同盟」の会議には、たくさんの方が集まりました。中心になってい

たのが、キューバとベネズエラとボリビアの三つの国でした。これからどうなっていくかはわかりませんが、「一〇〇年先にはアメリカの力はない」と言っている。ベネズエラも「一〇〇年後にはアメリカの世紀は終わっているだろう」と言っています。

### 「よくない戦争」「負けた戦争」としてのベトナム戦争

イラク戦争の泥沼を見ていると、アメリカ合州国は息切れしています。ベトナム戦争のときもそうでしたが、アメリカ合州国は巨大な力を結局、使えなかったんです。ベトナム戦争のときには、「トネルの出口が見えた」と何回聞かされたかわからない。「今度こそトネルの出口が見えた」と、何度も繰り返し言っていました。小さな人間の反逆を、強大な軍力をもっている国が抑え込めないところに来てしまっていて、これからどうなるかわからない。アフガニスタンでももめています。

アメリカ合州国はベトナムで失敗しました。「こんな国はチョロい」と思っただけで戦争をし、失敗したんです。これが大事なのは、いまだに日本には、ベトナム戦争は勝敗がハッキリしなかった戦争だという人が多いからです。アメリカ合州国の人はそんなことを言いません。

日本人は自分がベトナム戦争に使われていながら、直接自分の手では戦争をしていないから、おかしな認識がまかり通ってしまう。ベトナム戦争というのは、日本が存在したからできたんです。日本がいなかったらできなかった戦争なんだから、使われたんですよ。それぐらい非常に深く深くベトナム戦争に加わっていたのに、そういう意識は日本人のなかには少ないですね。

アメリカ合州国の人は、自分たちがベトナム戦争をしていたわけだから、アメリカ合州国は負けた、

そしてもう一つ、よくない戦争をした、という認識が非常に強いと思うんです。私はベトナム反戦運動をしていましたけれど、アメリカ合州国の社会では、それはプラス価値ですね。アメリカ合州国の大学で自己紹介をするときなどには、小田がしていたことはプラス価値として評価される。日本では、ベトナム反戦運動をしたということは、何となくマイナス価値ですが。

アメリカ合州国のベトナム戦争の中心人物で、国防省の長官だったマクナマラという人がいます。あのころベトナム戦争は「マクナマラの戦争」と言われたんですが、そのマクナマラ自身が、自伝のなかで、あれはまちがった戦争だった、そして負けたんだと、ハッキリ認めていて、今のイラク侵攻には直接・間接に反対したんです。「大量破壊兵器が存在する」と自分でウソをつくりながら、国連で発表した元国防長官のコリン・パウエルも、「あれはよくない戦争であった」、それから「負けた戦争である」とハッキリ認識している元軍人です。二人とも当然、ベトナムではまちがった戦争をしたと、それからもう一つは、負けた戦争であると言っている。その認識はアメリカ合州国では浸透していると思います。

ところが、日本では不思議なことに、「負けたか勝ったかわからない」という人がたくさんいます。それから、「あれはよくない戦争だった」とは言わない。それだけ参加したという自覚が少なかったんでしよう、自分たちがかわつたのに。この二つのポイントをめぐつて、ずいぶん認識がちがいますね。今の問題に対しても、アメリカ合州国とは意識の差が出て来ると思う。日本の場合は甘いと思うんです。

ベトナムは、あの長い長い戦争、フランスとの戦争、アメリカ合州国との戦争をした。フランス相

手の戦争とアメリカ合州国相手の戦争をやった彼らの認識は非常に単純で、「自分たちが勝った」ということです。彼らの戦争目的は、アメリカ合州国にベトナムの軍隊を送るなんていうことではない。要するに、自分の国から出ていってくれということを主張して、その通りになった。つまり、フランス同様、アメリカ合州国は負けた。

## 大国に「惨勝」したベトナム、中国

ただ、ベトナムは勝ったけれども「惨勝」です。惨敗という言葉があるけれど、彼らの場合は「惨勝」、惨めな勝利ですね。完全に惨めな勝利です。「惨勝」という言葉をつくったのは中国で、一九四五年の日中戦争で使われました。あのときの中国は、勝ったけれども、日本に侵略されて、滅茶苦茶にやられた「惨勝」なんです。

ベトナムの場合も、まさに「惨勝」ですよ。犠牲者の数を見たら、いつぱんにわかります。アメリカ合州国の兵隊で死んだ人は五万八〇〇〇人。ベトナムの場合は、民間人を入れて二〇〇万〜三〇〇万人が死んでしまった。この人数を比較したら、「惨勝」であることがわかるでしょう。それから爆弾などをたくさん落とされて、無茶苦茶になった。枯れ葉剤を落とされて被害を受けた人は四八〇万人で、そのうち、障害が残っている人は一〇〇万人ですからね、ひどい。

「勝ったけれども惨勝であった」。勝ったのはアメリカ合州国ではなくて、ベトナム。「惨」を与えたのはアメリカ合州国。それはハッキリさせておかないといけません。そのハッキリした認識が日本の場合は足りないと思います。アメリカ合州国は戦争で負けた国であるという認識をもっていないと、

アメリカ合州国が長いものでワーツとやるときに、それに簡単に巻き込まれてしまうでしょう。

アメリカ合州国がいつも勝つわけではない。ベトナムという小さい国に負ける体験をしているんです。その前はフランスだつて負けている。日本人は、アメリカ合州国という強大な国と戦つて負けたという記憶はあるけれども、その強大な国がちつぽけな国と戦争をして負けたとは思っていない。しかし、アメリカ合州国も、ちつぽけなところと戦争をして負けた。フランスも負けた。

話が飛ぶけれども、日本の場合も、豊臣秀吉が朝鮮侵略をしました。豊臣秀吉の「朝鮮出兵」と言っているけれども、侵略ですね。侵略戦争を七年半もやつたんです。しかし、われわれ日本人には、豊臣秀吉が侵略戦争をしたという反省が非常に足りないと思う。それからもう一つは、朝鮮側に負けたという認識が欠けている。最後はもう這々ほうほうの体で引き上げた。ベトナム戦争とそっくりですよ。

朝鮮側には日本を侵略するつもりはありませんでした、要するに、朝鮮側は日本人が出ていくことを戦目的にしたんです。日本側は侵略し、負けて、追い出されたんです。侵略したのは確かです。その二つの認識が、豊臣秀吉の朝鮮侵略、いわゆる「出兵」では、日本人の認識のなかに入っていないと思います。

ベトナム戦争というのは、アメリカ合州国が負けた戦争だった。その次に、ソビエトがアフガニスタンを侵略して、これも負けて、同じように追い出された。つまり、超大国が負けたんです。大国二つがベトナム相手にやつて負け、ソビエトもアフガニスタンに入つて負けてしまった。勝利を収めたのは、ゲリラであれ何であれ、結局、小さな人間の力でしよう。そこが大事だと思います。

## アメリカ合州国の「トンネル」の外へ

あの、要するに負けていくベトナム戦争のなかで、アメリカ合州国は、絶えず「勝つ」「勝つ」「勝つ」と言いつづけた。「トンネルの出口が見えて来た」と何遍も言いました。でも、結局、出口を出られませんでした。最後には、パリ会議で和平が成立し、引き上げることになって、ベトナムが意図した通りになったんです。

私は、今のイラクは出口がない状況だと思う。トンネルのなかに入っている、そして、いろんな国がトンネルのなかに引きずり込まれている。そのなかに自らすすんで引きずり込まれているのが日本、あるいはイギリスのブレア政権。正直なところ、ロシアも中国も、そのなかに入りたくないでしょうね。一方、逆にトンネルのなかに「入れてやらない」と言われているのが、北朝鮮やイラン。入れる必要はない、あれは敵だから、絶対入れないと、アメリカ合州国はほざいています。それで彼らが生き延びられるかどうか、わかりません。とにかく、トンネルのなかにみんな入ろうとしています。

しかし、出口のないものに入ってどうするのか、というところに来ていると思うんです。そういうところに入ったらいけないといっているのが小国キューバ、小国だが資源大国であるボリビア、ベネズエラです。他のラテンアメリカ諸国にも、そういうところには入らない、入ろうとしない国が多いようです。先がないと考えているのでしょうか。

日本もそのトンネルのなかに入って、ニコニコしていたらダメだと思います。われわれは、トンネルのなかから外に出ることを考えなければいけない。いかに出るかという、たとえば、「非同盟」

のやり方が一つあるでしょうね。そこへ何らかの形で、われわれが結びつくということは、長い目で見て非常に重要でしょう。アメリカ合州国の出口の見えないトンネルに入っているも仕方がないのだから。

われわれは、大きな変化のなかに立っているんだと思います。これからできる限り、アメリカ合州国から独立していくことが必要でしょうね。日米安全保障条約をやめるとか、憲法をちゃんと守り抜くとか、そういうことが一つひとつ大事です。それを、日本だけの問題ではなくて、全世界的な動きと結びつけていくことを考えたほうがいいと思うんです。軍需産業はやらないとか、武器輸出はしないとか、それは日本だけの問題ではない。全世界の動きと結びついているのだから、認識を新たにしたほうがいいと思います。

「九・一一」以来の世界の動きのなかで、アメリカ合州国が強引に長いものをつくり上げ、それにわれわれも巻き込まれています。「テロ撲滅」とかいろんな名目を掲げて、アメリカ合州国一辺倒の世界を構築しようとしている。すでに破綻をきたしていますが、そのなかにわれわれは巻き込まれている。巻き込まれているなかで、見えない形で、ある考え方が世界にまん延しつつあります。「戦争に正義がある」、「正義の戦争がある」という考え方は、「テロ撲滅」という大義名分を掲げ、「自由と民主主義を守れ」という大義名分を掲げ、軍事力を強化していく前提には、「われわれのやる戦争は正義である」、「正義の戦争はある」という考え方がある。これがもういつべん、世界で人びとの心のなかに力を現わして来ていると思うんです。それは目に見えないものですが、今、大問題を引き起こして来ています。

## 「戦争に正義はない」という思想の台頭

歴史上では、「正義の戦争はない」という考え方は、むしろウラの思想だった。オモテの思想は、全世界で古代からずっと「正義の戦争はある」という考え方でした。ただ、それには前提が一つあるんです。自分の戦争は正義で相手は不正義だという前提です。その前提がついているんだけど、「戦争に正義はある」、「正義の戦争はある」、この考え方は、古代からずっとある。小さな貴族の戦争から、王様の戦争から、社会主義国の戦争まで、全部に抜きがたくあります。

それに対して、「戦争に正義はない」「正義の戦争はない」という考え方はごく新しいものです。日本には今平和憲法があるから、そんな考え方は昔からあると思われがちですが、実はちがう。「正義の戦争はある」というのが、古代から二〇世紀までの常識なんですよ。ときどき、「戦争に正義はない」という人が出て来ますが、それはフアナティックな人、狂信的な人と見なされて来ました。狂信的な王様がいたりしただけです。

全世界にまん延した思想、伝統的な思想とは、「戦争に正義はある」「正義の戦争はある」「すべき戦争はある」というものでした。歴史にずっと行き渡っているのは、それです。それに人びとが根本的な疑問をもつようになって来たのは、ようやく第二次世界大戦後、ごく最近、戦争が終わってから六〇年ぐらいの間のことです。

なぜ市民権を得たかというところ、理由があります。第二次世界大戦において、滅茶苦茶に人が殺された。ものすごく武器が発達し、その発達の究極が原子爆弾だったわけです。が、まず第一次世界大戦にお

いて、強力な武器の発達によつて滅茶苦茶なことをして、「戦争に正義はない」という観念が強くなった。そのへんから始まつて、第一次大戦後に、平和主義の思想が強く出て来て、国際的な条約を結んだりしています。それでも、第一次大戦は、第二次大戦に比べればたいしたことはなかつた。第二次世界大戦は、殺した数が滅茶苦茶ですからね。いろんな算定方法があるけれども、五〇〇〇万人とか六〇〇〇万人とか、猛烈に巨大な数の人が死んだ、殺された。

もう一つの理由は、犠牲者の多くが民間人だつたことです。戦闘員ではなかつた。昔は、戦闘員だけの戦争だつたはずが、民間人がものすごく巻き込まれるようになった。巻き込まれる最大の理由というのが、空襲、空爆です。空から無差別爆撃をする。これは完全な国際法違反です。それが国際法違反であることを、誰も問題にしないのは、誰もがでたらめをやっているからです。このことを忘れてはいけません。

空爆によつて、ものすごく民間人の死者が増えたわけです。いろんなパーセンテージを出す方法があるけれども、第二次世界大戦は犠牲者の半分以上が民間人であるとか、朝鮮戦争では八五%以上だということすごいことになって来た。女子どもも無差別に殺された。それがあまりにもひどかつた。民間人の犠牲者が多く、戦闘員はかえつて死なないということになってしまった。

## 殺し、焼き、奪い、殺され、奪われ、焼かれた歴史

最初の爆撃は、植民地に対して行います。殺してもかまわないと、そのままダーツと爆撃する。それをアジアにおいて最初に大々的にやったのは、日本です。満州でやり出した。私は子どものときに、

「渡洋爆撃」と言つて、海軍の双発の爆撃機が海を越えていく絵を講談社の絵本で見ました。どこへ行つたかというと、南京です。南京を空爆し、その後南京が陥落すると、次は武漢、そして重慶ですね。そして、それが何年か後になると、「渡洋爆撃」はそのまますべて逆に日本へ返つて来た。

サイパンやテニアンやマリアナを落とした米軍の最大の目的は、あそこから日本に空襲ができるからです。日本軍がつくつた基地をそのまま使つて、米軍機を運んで来て、一九四五年三月から本格的に空襲を始めた。さらに、新しい対日爆撃の司令官カーティス・ルメイが、空襲方法を変化させました。超低空から、爆弾ではなくて焼夷弾による攻撃にして、空襲で焼き尽くす作戦に変えたんです。

それは革命的な方法で、日本には対空砲火の力がないということも見越していた。日本の家というのは木と紙でできているからすぐに燃える。ルメイに言わせれば、日本の軍需産業は町なかの中小企業が多いから町中を爆撃してもかまわない。しかし、それは、都市すべてを焼き尽くすということでした。三月一〇日に東京空襲が始まつて、一夜で一〇万人以上が死んだ。そして名古屋、大阪、神戸。この四つの都市を爆撃したから、テニアン島の焼夷弾と爆弾の備蓄がゼロになつてしまつた。そのぐらい使つて、完全に焼き尽くしたんです。

これは完全な国際法違反です。日本が始めたときよりもっと大規模にやる。同じことがドイツでもありました。ドイツが一番初めに、ヨーロッパにおいて無差別爆撃を敢行したのはオランダのロッテルダム。町の一部を焼き尽くしたんです。これで八〇〇人以上を殺しています。

それから、今度は反対に連合軍がドイツに対して空襲を行った。イギリス空軍とアメリカ空軍が一緒になつてドイツを爆撃しました。一九四五年二月にはドレスデンを大爆撃して、少なめに見積もつ

ても一三万五〇〇〇人ぐらいを一夜で殺し、完全に破壊した。あそこは軍事施設は何もないところ  
です。ドレスデンでその空襲に遭遇したのが、アメリカ合州国の作家カート・ボネガットです。彼  
は「一三万五〇〇〇人のヘンゼルとグレーテルが殺された」と書いています。

こういう殺し合いをわれわれはやつて、殺し、焼き、奪つた後に、殺され、焼かれ、奪われ、おび  
ただしい犠牲者を出したわけです。この辛く厳しい歴史への思い、実感が一番よく表現されているの  
が、広島で被爆した詩人・栗原貞子の詩「ヒロシマというとき」ですね（注7）。こういう歴史を繰  
り返したくないというのが、私のあらゆる思想の出発点です。

われわれの戦争の歴史では、第二次世界大戦が終わつた後において初めて「こんなことをしていた  
らダメだ」と、「戦争に正義はない」ことを痛感した。簡単に言うと、そういうことを痛切に感じた  
のはドイツ、日本です。「正義のない戦争」をして、最後にどんでん返しを食つた。どんでん返しは  
われわれの「正義の戦争」の結果だけれども、歴史的な過程のなかでは、「正義のない戦争」です。「戦  
争に正義はない」ことを立証するような戦争をしたわけです。

ところが、敵対した連合国のほうは、「正義のない戦争」をやつつけるんだから、逆に「正義の戦争」  
でしょう。その「正義の戦争」が大空襲をする。原爆を落とす。われわれを殺す。自分たちがしてい  
るのは「正義のない戦争」ではない、という考えが日本の側にも連合国側にもある。

われわれが「正義の戦争」だと信じてした戦争は、それと戦うのが「正義の戦争」だと信じた者た  
ちによって負かされ、結局、どちらも「正義のない戦争」なんだと学ぶ体験をしました。こうして、「正  
義のある戦争」は、「正義のない戦争」へ転換したのです。

つづきは製品版でお読みください。